

## 第5文型再考

片桐史恵<sup>1)</sup>・田路敏彦<sup>2)</sup>

### A Note on the Sentence Pattern SVOC

Fumie KATAGIRI and Toshihiko TOJI

本稿の目的は、学校文法における第5文型(SVOC)を再検討し、その統語構造の探究、及び統語解析の誤分析を通じて、従来の捉え方の問題点を明らかにし、その存在意義そのものに疑問を投げ掛けることである。そのために、まず第2章では、SVOCのOCの部分の統語上1つの構成素、すなわちsmall clause(SC)を形成していることを様々な証拠から確証し、さらにSCが第5文型に留まらず、英語という言語の中に深く浸透していることを明らかにした。第3章では、日本人高校生に頻繁に見られる、第5文型に関する統語解析上のミス指摘し、その原因が、SVOCという平板で線状的な構造認識自体に内在することを明確化した。これらの結果を踏まえて、SVOCをSVOとして捉え直す第5文型廃止論を提唱した。

キーワード：SVOC、small clause、統語解析、construction、言語獲得

#### 1. 序

本稿は、Mary considers John intelligent. に代表されるような、学校文法におけるいわゆる第5文型、SVOCに関して、理論的かつ英語教育的観点から、従来の分類の仕方の妥当性を検証するものである。そもそもSVOCという表記自体、文法関係(S, O, C)と統語範疇(V)が混在しているので不適切であり、一貫性を保持するには、SPred(icate)OCとするか、NVNA(djjective)とすべきであろうが、本稿でも慣例に従いSVOCを使用することとする。学校文法においてもJespersenのnexus(ネクサス)の考えに基づき、O=Cの関係、つまり主述関係(subject-predicate relation)が成立することを、この文型を見分ける根拠として教えることになっているが、dominance relation(支配(上下)関係)を排し、precedence relation(先行(前後)関係)のみに基づき、このような平板で線状的な統語構造を付与しておきながら、意味的な観点からその主述関係を捉える(つまり節

(clause)と見なす)という、一見矛盾した考え方は本来妥当なものであろうか。

それを明らかにすべく、本稿では、まずOC(一般的に小節(small clause(SC))と呼ばれている)の統語構造の本質を解明し、次に日本人英語学習者(主に高校生)によく見受けられる、SVOCや関連する構文に関する誤った統語解析(syntactic parsing)の実態を指摘し、最後に、英文法教育に対するささやかなる提言を行う。

#### 2. 1つの構成素としてのSC

SCがただ単に意味的に主述関係を有しているだけではなく、統語的にも1つのかたまり、つまり構成素(constituent)を成していることは、次の(1)の諸例から明白であろう。

- (1) a. John considers it likely that Mary will win the prize.
- b. We saw it raining heavily outside our house.

1) 人間福祉学部人間福祉学科    2) 箕面自由学園高等学校

- c. They made it seem that John had stolen the money.
- d. Let there be no mistake about it.
- e. I've never seen there be so many complaints from students before.
- f. It was myself blond that I imagined.
- g. Mary considers John a fool and Bill a wimp.

(1a, b, c)では、それ自体に独自の意味内容がなく、単独では項(argument)の位置に現れることができない、いわゆる虚辞(expletive)のitが使用されており、(1d, e)でも、itと同様な性質を持った虚辞のthereが現れている。これらの現象はSCが構成素を成している最も強力な証拠と言ってもよからう。また(1f)の分裂文(cleft sentence)や(1g)の等位接続文の振舞いから、OCが構成素であることは自明である。ここで指摘しておかなければならない重要な事実がある。それは当該のSCがVの後ろに現れるだけではなく、より広範囲に亘って出現することである。つまりSCは第5文型固有の現象ではないのである。(2)に注目して頂きたい。

- (2) a. Workers angry about the pay is just the sort of situation that the ad campaign was designed to avoid
- b. Robin falling on the ice would be a disaster.
- c. We talked about Sandy angry.
- d. A horrible vision of myself working in my father's bakery popped into my mind.

主語位置(2a, b)や前置詞(P)の後ろ(2c)、更には知覚名詞の後ろ(2d)にSCが出現している。一見形容詞句や分詞による後置修飾のように見えるが、そうではないことは、動詞の呼応(2a)(名詞は複数形のworkersだが、be動詞がisという単数形になっている)や、固有名詞や再帰代名詞は被修飾語にはならないという事実(2b, c, d)に着目すれば自明である。更に次の構文にも注目して頂きたい。

- (3) a. There were at least 40 people sick.
- b. There was a discussion suggested.
- c. We will lose the game with John a goal keeper.

- d. With the cat out of the bag, there's not much point in trying to hide the truth anymore.

(3a, b)はいわゆるthere構文(挿入)と呼ばれるものであるが、ここでもbe動詞の後にSCが現れている。後置修飾ではないことは(3a)の例から明らかであろうし、there構文の情報構造上の機能が、ある物や人を初めて談話に導入し、それに関して更に情報を追加することであるので、認知的には通常のthereのない文と等価な意味を持つことから、妥当な分析と言えよう。また(3c, d)に関しては、学校文法で言う付帯状況のwith構文であるが、(3d)のようなイディオム表現が現れていることから、SC分析は正当化されよう。

(4)の諸例はMad Magazine sentenceと呼ばれる表現であるが、これらはmatrix sentenceとしてSCを使用する。

- (4) a. What, me worry?
- b. My boss give me a raise?! Ha.
- c. Him wear a tuxedo?! He doesn't even own a clean shirt.
- d. John mad? You are joking!
- e. Larry a doctor?! What a laugh.
- f. What! Mary in the army?! It can't be.

驚き、不信、疑念、軽蔑などの感情が表出されているが、会話という最も生々しい状況でSCが使用されているという事実は、SCが単にある統語構造の一部として組み込まれる付加的なものというよりも、むしろもっと原初的な1つの表現形式として位置付ける可能性をも示唆する現象として、注目に値する。もともとSCは、full sentenceからTense(時制)やAspect(相)やAgreement(一致)が抜け落ちているがゆえに、“small” clauseと呼ばれるようになったのだが、単なる不完全、不十分な文として扱うのではなく、独立した存在として見直すべきではなかろうか。実際(4a~f)によって実に多様な含意が表されている。このようにSCを言語構造においてむしろ核となるものとして捉えることに、更に支持を与えてくれるであろう現象として、第一言語獲得からの次のデータが示唆に富んでいる。

- (5) a. Mummy do it. Me do it.  
 b. Lisa naughty.  
 c. Mouse in window.  
 d. Daddy coming.  
 e. Her gone school.

(5a)は特に root infinitive(主節不定詞)と呼ばれており、すべて実際に幼児が発した発話の記録である。大人のものより当然のことながらも断片的であり、文法間違いを含んではいるが、SCの萌芽が見て取れることは間違いのないであろう。個体発生は系統発生を繰り返す、とする進化生物学のテーゼからすると、(5)のような発話を我々の祖先は行っていたのかもしれない。その意味において、SCは言語進化のいわば living fossil という捉え方もできるのかもしれない。

これまでの議論から、SCが1つの構成素として機能していることは十分に確立されたと思われるが、厳密な内部構造には触れてこなかった。SCとはあくまでも一連の表現に対する包括的な用語として使用してきたにすぎない。その内部構造に関する研究は多数存在する。少なくとも T(ense)がないことは自明であろうが、I(nflection)はどうだろうか。はたまた Agr(ement)は。Pr(edication)や R(elator)という統語範疇を設定する研究者もいる。詳細な句構造(phrase structure)の提示は本稿の範囲を超えているので、これ以上立ち入ることは控えさせて頂くが、(6)の例文は何らかの示唆を与えてくれるかもしれない。

- (6) a. I regard it as obvious that he will win.  
 b. He took her for a lawyer.

これらもまた as と for をまたいで SC を構成していることは明らかである。だとすれば、as や for を主要部(head)とし copula の働きをする、何らかの機能範疇(functional category)の投射(projection)と見なすのは穏当なことであろう。つまり regard や take では head が発現し、その他の場合はそれが null のままだと考える訳である。また知覚動詞(perception verb(PV))の場合には、原形不定詞か現在分詞を取り、それぞれ動作の完結か継続を表すことから、Asp(ect)を設けることにも首肯できる。

この議論はここまでにして、本章で明確になったことは、SVOCにおけるOCは厳密な意味で統語上1つの構成素であり、Cは決してSVOに対して付加的・2次的な機能を有しているのではないということである。更にSCの分布は第5文型に留まらず、もっと広範囲に及ぶことも明らかにした。

### 3. 言語処理に関して日本人英語学習者が抱えるある問題

言語処理(language processing)とは、記号列や発話に統語構造を付与し、意味を理解することであり、専門的には統語解析(syntactic parsing)と呼ばれ、それを行う脳内の仕組みを parser、またそれに関わる方略を parsing strategy と名付けているが、(1)のような文の持つ曖昧さ(ambiguity)を説明するのに有効である。

- (1) John told the girl that Bill liked the story.

1つの解釈、かつ優先的な解釈は、that Bill liked the story を補文(complement)として捉えるものであり、もう1つの解釈は、that Bill liked が関係節として the girl を修飾するものである。好まれる解釈の方は、parsing strategy の1つである Minimal Attachment(MA)(埋め込み(embedding)の数を最小にする)に従った結果である。もう一方は、再分析(reanalysis)を適用したものである。これらの一般論を踏まえて興味深い事実は、日本人英語学習者(ここでは高校生)が第5文型のCをOへの後置修飾句として捉えてしまう誤分析(misanalysis)が頻繁に見られることである。特に現在分詞(ing形)のときに際立っているとの印象がある。また there 構文や with 構文においても同様な誤分析が高い確率で発生する。それは一体なぜであろうか。前者に関して言えば、そのヒントは、半世紀近い前から提案されている、parsing strategy の1種である NVN-schema にあるように思われる。次のように表すことができよう。

- (2)
- |            |       |        |         |
|------------|-------|--------|---------|
|            | John  | kicked | Peter   |
| SYNTAX :   | N     | V      | N       |
| EMANTICS : | Agent | Action | Patient |

これは近年提唱されている構文文法 (construction grammar) という言語理論において、その中核となる construction という概念に対応するものであるが、construction とは、form-meaning pair であり、このまま記憶に貯蔵される。(2) は transitive construction と呼ばれるものであり、統語解析の際にも発動されることになる。注目すべきことは、英語母語話者だけではなく、日本人高校生にもこの構文が完全に習得されており(後述する調査では81.6%の定着度合い)、それが逆にうまく行き過ぎているがゆえに、過剰適用してしまい、無理矢理Cを直前のOの修飾句として埋め込んでしまい、より大きな名詞句(noun phrase(NP))を形成しようとする、MAに反する解釈を行っているのではないかということである。これに関連して次の文にも注目して頂きたい。

(3) The horse raced past the barn fell.

(3)は非常に有名な garden path sentence(袋小路文)と名付けられている文で、英語母語話者でも最初に誤分析してしまい、後に再分析を余儀なくされるという代物である。これには(2)の前半部分、つまり NV-schema、言い換えれば、intransitive construction が適用され、the horse が主語、raced が述語と解析され、最後になって fell が登場することによって、これまでの解釈がひっくり返されるという難物なのである。まさに袋小路に迷い込んでしまったが如くである。正しい解析はもちろん raced が過去形ではなく、過去分詞形であり、raced past the barn が the horse に対する後置修飾句としての働きをするというものである。この文が袋小路文である所以は、race が規則変化動詞で過去形と過去分詞形が同形になり、かつ自動詞用法と他動詞用法の両方があることである。従って次例は英語母語話者にとっては、garden path にはならない。

(4) The horse ridden past the barn fell.

なぜなら ride は不規則変化動詞で、ridden が過去分詞形であることが一目瞭然だからである。

高校生を対象とした中学英語定着度調査の結果によると、次例の定着度合いはきわめて低い。

- (5) a. The girl buying shoes is my sister.  
b. The watch broken by Ken was a present.

(5a)で約26%、(5b)に至っては何とたった11.2%である。どちらも修飾・被修飾関係としては解析しにくいのである。特に(5b)の結果が悪いのは、英語母語話者とは異なり、動詞の活用に関する認識が低い(実際10.5%のエラーが出る)ので、過去形の broke と過去分詞形の broken の区別がつきにくいのではなからうか。ゆえに英語母語話者にとっての(4)のようにはならないのであろう。

もう1つの誤分析の例である there 構文や with 構文に関しては、日本語の存在文「AがBにある」に対して、there 構文における NP は不定のものに限られるとする定性条件を無視して、過剰適用するエラーが32.9%もあることから、逆にこの構文の定着度が高いことが推測されるし、また with は P であり、直後に NP が来る語順の定着度はきわめて高い。従って transitive construction 同様、NP の後ろの表現をその修飾語句として捉えてしまう傾向が強いのであろう。もうこれらの there construction と prepositional phrase (PP) construction についてはこれ以上触れないことにする。これ以降は話を SVOC に限定する。

ここまでの議論から明らかになったことは、英語母語話者と同様に日本人英語学習者にとっても、transitive construction と intransitive construction はほぼ完全に習得されており、それゆえに SVOC の O と C の間に主述関係を読み取らなければならないのに、修飾・被修飾関係と誤解析してしまい、逆に修飾・被修飾関係と解析しなければならないところで、主述関係と捉えてしまうという矛盾が生じていることである。この問題をどのように解消すればよいのであろうか。最終章でそれに寄与するかもしれない一つの提言を行いたい。

#### 4. 結論 — 第5文型廃止論に向けて —

前2章において、構成素としての SC の存在を確立し、また日本人英語学習者に頻繁に見られる統語解析のエラーを指摘した。特に後者に関しては、transitive construction の完全習得がかえって仇となって、このような問題が発生したことを明らかに

した。結局この問題の元凶は、SVOC という第5 文型の存在自体に内在しているのではなからうか。第1 章でも既に触れたように、そもそも人間言語に特有な階層性(hierarchy)、平たく言えば dominance relation(縦の関係)を無視して、最終記号列、つまり precedence relation(横の関係)にのみ注目を集めるような表記法そのものに大いに問題がある、と断ぜざるを得ない。意味的な観点からではなく、SC を統語的に1つの構成素として真正面から捉え、その指導を徹底し習得させることこそが、外国語学習としての英語教育にとって最も重要なことだと思量される。その実現のため、第5 文型(SVOC)廃止論を提唱したい。従来 SVOC と分類されていたものは SVO として捉え直し(単なる transitive construction と見なす訳である)、あくまでその O の1つの現れとして SC がある、と考えるのである。Chomsky の生成文法(generative grammar)の立場に立てば、自然言語固有の最大(かつ唯一)の特徴である recursion(回帰性)(ある統語範疇の構成素を同一範疇の別の構成素に埋め込むこと(embedding))の認識を高めることは、外国語学習者にとっても不可欠であり、その意義は大きいと確信する。

加えて、言語獲得(あるいは言語進化)の観点からは、(1)のように、まず SC からスタートし、それを土台としてその上に TP の層(layer)が乗り、更にその土台の上に CP の層が乗るというプロセスを経ることになる。

- (1) CP > TP > SC (C は complementizer のことで、接続詞の that や WH- 句の受け皿となる機能範疇である)

これは次の例文に対応する。

- (2) a. I find that this chair is comfortable.  
b. I find this chair to be comfortable.  
c. I find this chair comfortable.

語用論的な観点からは、一般的に(2a)→(2c)の方向で直接体験に基づく認識の度合いが高まると言われている。CP、TP layer が剥ぎ取られている分、(2c)の find と SC との結び付きは強固であるとも言えよう。ところが学校文法では(2a)を SVO と分類

し、(2b, c)を SVOC と分類するという、不一致が見られるが、これらが基本的に同一線上にある表現の、異なった表出であることは明確であろう。更に次例も興味深い。

- (3) a. Do want he walk?  
b. You want I finish my milk?  
c. I want she visit for a while.  
d. I want my doll's waking up.  
e. I want dat came out.

これらは第一言語獲得からのエラーのデータであるが、このことから幼児は want の後ろには文(節)が来るとの認識があることが推察される。更に embedding(subordination)の前駆体として、parataxis(並列)の段階が存在する可能性をも強力に裏付ける証拠と言えよう。

このように従来第5 文型として分類されてきた構文を、SC という観点から見直したときに、実は予想に反してその基準からはみ出すものが1種類だけ残された。次例を見られたい。

- (4) a. The Government appointed Mr. Brown ambassador to Peru.  
b. We elected John president.  
c. John hammered the metal flat.

(4a, b)はこれまで SVOC の典型例として扱われてきたが、SC と思われてきた要素は構成素ではなく、また意味的観点からも VO は C 抜きで、独立して成立している。これはまさに(4c)のいわゆる resultative secondary predicate と同一の振舞いである。SC と(4c)の相違は do so の振舞いにも明確に現れる。

- (5) a. \*Hans kept it a secret that he had inside information, and his girlfriend did so that he had inside information.  
b. ?We painted benches white, and they did so red.

(4a, b)は SVOC の残骸のようなものであるが、これをこのまま第5 文型として残すのか、resultative

construction(結果構文)という極めて生産性の高い construction として再分類するのは、後者の方が適切だと思われるが、これ以上は立ち入らないこととする。

## 引用文献

- Aarts, B. (1992) *Small Clauses in English*. Mouton de Gruyter
- Akmajian, A. (1984) "Sentence Types and the Form-Function Fit." *Natural Language and Linguistic Theory* 2: 1-23
- 安藤貞雄 (2008) 『英語の文型』 開拓社
- Bowers, J. (1993) "The Syntax of Predication." *Linguistic Inquiry* 24: 591-656
- Cardinaletti, A. et al. (eds.) (1995) *Syntax and Semantics* 28. Academic Press
- Culicover, P. et al. (eds.) (1977) *Formal Syntax*. Academic Press
- Culicover, P. (2009) *Natural Language Syntax*. Oxford University Press
- Diessel, H. (2004) *The Acquisition of Complex Sentences*. Cambridge University Press
- Dikken, M. (2006) *Relators and Linkers*. MIT Press
- Felser, C. (1999) *Verbal Complement Clauses*. John Benjamins
- Gorrell, P. (1995) *Syntax and Parsing*. Cambridge University Press
- Hauser, M., N. Chomsky, and W. T. Fitch (2002) "The language faculty: What is it, who has it, and how did it evolve?" *Science* 298: 1569-79
- Hilpert, M. (2014) *Construction Grammar and its Application to English*. Edinburgh University Press
- 稲田俊明 (1989) 『補文の構造』 大修館書店
- 金谷 憲(編著) (2017) 『高校生は中学英語を使いこなせるか?』 アルク
- Nakajima, Heizo et al. (eds.) (1991) *Topics in Small Clauses*. Kurosio Publishers
- Progovac, L. (2015) *Evolutionary Syntax*. Oxford University Press
- Radford, A. (1990) *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax*. Blackwell